

論文内容の要旨

論文題目 資本による資本の生産

氏 名 佐 藤 隆

1 資本の形式

第1章「資本の定式」では、『資本論』の読解を通じて、商品の流通と対比しながら資本の運動に一般的な表現を与える。商品流通では、その形式が形態変換、内容が素材変換であるのに対し、資本運動では形式が姿態変換、内容が自己増殖であることが本章前半において確認される。伝統的には、姿態変換を繰り返す自己増殖運動と捉えられることの多い資本の一般的定式に対して、本論文では、姿態変換という資本の形式には貨幣流出入の交差的な運動との規定を与え、自己増殖という資本の内容には流出入を通じて得られる正の格差との規定を与えている。資本の一般的定式とは、これら二つの規定の統合である流出入格差原理であり、資本の形式と内容の総体をもって定式化される。次に本章後半において、この一般的定式から、資本の三つの定式、すなわち商人資本的・金貸資本的・産業資本的の各形式を導き出す。複数の流通圏を設定し、商品と貨幣の増殖がいかにして複数の流通圏の間で流出入するかを定式化することによって、資本三形式を導き出すことができる。だが、単一の流通圏を設定すると、産業資本的形式のみが自己増殖可能であることが明示される。

第2章「資本の循環」では、産業資本的形式が資本の一般的定式である流出入格差原理を満たすことを明らかにする。まず、幾つかの代数的な定義を与えた後、産業資本の三つの循環定式である貨幣・生産・商品の各資本の循環を定式化する。三資本各々の増殖分について、貨幣資本は貨幣流入から貨幣流出を引いたもの、生産資本は投入から費消を引いたもの、商品資本は産出から販売を引いたものと定義することができ、それら三循環がすべて資本の一般的定式に当てはまることが立論される。次に、それらの総和として産業資本的形式が定式化される。産業資本的形式の増殖分は、利潤という流入分と配当という流出分との格差として定式化され、産業資本的形式が一般的定式に当てはまることが主張される。なお、産業資本的形式は、その個別形式である貨幣資本の循環形式とは区別される。

第3章「資本の過程」では、産業資本における流入から流出への移転または伝達の過程を考察する。生産・販売・購買の三つからなるこれらの過程は、生産・商品・貨幣の各資本の姿態変換の運動過程に対応している。各局面において「時間の履歴」が定義され、これを用いて流出入間の伝達が定式化される。これは、流入（入力）と流出（出力）が既知で、未知のシステムの増殖分を求める資本システムの同定問題を解くことに帰着する。これを解くと、流入と流出のフロー総体が満たさなければならない動的システムの特性方程式が導き出され、資本制システムが正のフィードバックをもった閉ループシステムであるという結論が得られる。つまり、入力が出力の増大を呼び、出力が入力の増大を呼ぶようなフィードバックをもち、貨幣・生産・商品のどの循環定式から出発しても元の定式に戻ってくるループを描くシステムであることが分かる。こうしたサイバネティックな資本制システムは、あたかも資本それ自体が自律的で自動的に運動するかのように振る舞うことになる。さらに、ストック総体の水準を構成する生産・商品・貨幣の各資本水準が回転期間を用いて定式化され、産業資本水準総体が併せて導出される。しかしながら、産業資本水準そのものは、価格体系や利潤率、数量体系や成長率に依存しており、個別資本の水準は社会的総資本の再生産過程から独立には決定されないことが論決される。

2 資本の内容

資本の内容を論ずる第二部では、まず最初に、資本の内容として適切なのは自己増殖「量」ではなく「率」であるべきことが主張される。第一部で資本の形式を通じて得られた特性方程式が、未知数を決定する方程式である一方、第二部では、利潤率、成長率、利子率といった増殖に関する比率が内生変数とされ、これらを決定するのが第二部の主要な役割であることが主張される。

第4章「資本の再生産」では、前半において、伝統的には利潤論で論じられた均等利潤率および価格体系の存在が論じられる。まず、利潤率の定義から利潤・成長フロンティアが導き出される。これは任意の成長率に対する均等利潤率の軌跡のことであり、緩やかな仮定のもとで右下がりとなる。次に、特性方程式から資本の整合条件を示すケンブリッジ方程式が導出される。これは利潤率に蓄積性向を掛けたものが成長率に等しいことを主張する方程式であり、この成長率は概念上、ほぼ保証成長率と一致する。したがって、この二つの方程式の交点で均等利潤率と保証成長率が決定され、あわせて正の価格体系の存在が保証される。だが、そこで決定される保証成長率は、需給が一致し市場が清算されるような現実成長率ではない。本章の後半では、再生産表式論を参照しつつ数量体系を明示しながら、保証成長率と現実成長率とが一致する条件を探る。貨幣を明示的に導入した再生産表式の下では商品の需要総額と供給総額とは一致せず、その差額である商品の超過需要総額は、貨幣の超過供給総額に等しくなってしまう。貨幣の超過需要が0となる条件は、成長率が0である単純再生産の場合か、購買期間が0であるセイ法則を仮定した場合かであることが明らかとなる。逆に、セイの法則が仮定されていない場合、商品を購入するのに少しでも時間がかかれば、保証成長率と現実成長率とは一致せず、資本の自己増殖運動と社会的総資本の再生産とのあいだに亀裂が生じてしまうことになる。

第5章「資本の調達」では、保証成長率と現実成長率とが一致する条件を探るべく、セイ法則の仮定をゆるめると同時に、商品購入の資金が商品販売によってのみ調達されるという仮定をゆるめ、資本制経済に信用を導入する。前半において、商業信用と貸付資金が存在する場合の超過需要が考察される。商業信用では、約束手形とキャッシュフローの流出入がそれぞれ定式化される。商業信用における約束手形は、各個別資本に対しては貨幣資本の過不足を調整する役割を果たすことができる。だが、それは部門間不均衡を調整することはできても、総需要の不足については調整することができない。そこで、負債を考慮した産業資本の循環定式が定式化される。明示的に貸付資金や利子率が導入されると、たしかに総需要と総供給を一致させるような自然利

子率の存在が言えるものの、そのもとで保証成長率と現実成長率が一致するのは、成長率が利子率よりも大きくなってしまふような、借金によって借金を返済していくポンジ金融経路だけであることが立論される。ゆえに、ポンジ金融禁止条件がこの経済に課されると、正の成長率は存在しなくなる。本章の後半では、銀行資本・中央銀行および株式資本が定式化される。市中銀行は株式会社として産業部門に対して貸出業務を行い、資本家家計からは預金の受入業務を行う。また、中央銀行は市中銀行から準備金を受け入れ、市中銀行に貸出を行う。また、株式資本は資本還元によって株価が決定され、株主はその株価のもとで売買を行い、預金の提供とともに資金供給の担い手として定式化される。

第6章「資本の分配」では、前章での定式化を踏まえ、銀行部門と株式部門という間接・直接金融が導入されると、現実成長率と保証成長率が一致するような条件が成立することが確認される。需給一致条件が成立する場合、資本家家計・個別資本・銀行資本の各々で独自のケンプリッジ方程式の成立が本章前半において確認される。それらは、市場清算が成立する場合の主体均衡条件に他ならない。資本家家計は利子率と貯蓄性向の積が成長率に等しく、個別資本の場合は、企業者利得率と蓄積性向の積が成長率に等しく、銀行資本の場合は貸出利子率と蓄積性向の積が成長率と等しくなる。本章後半では、今までに導入された未知数を決定するための追加方程式が論じられる。まず、貸出利子率と預金利子率、そして産業部門の企業者利得率と銀行部門の企業者利得率の2つの裁定条件により2本の式が追加される。また、限界利潤率が意外の利潤に等しいという条件より、貯蓄から独立な投資関数が1本追加される。合計3本の追加によって、金融市場を含めた「順調な拡大再生産軌道」の存在が確認される。

3 資本の形式と内容

最終章「資本の形式と内容」は、経済学史上で資本がどのように捉えられてきたかを簡略ながら振り返ることによって、本稿独自の理論的意義を浮かび上がらせようとする。経済学史上の伝統的な立場は、二つの陣営が存在した。ひとつは資本を資本金と同一視し、もうひとつは資本を資本財と同一視していた。資本金を資本と見なしたのは、それが将来利子をもたらすからであり、資本財を資本と見なしたのは、それが労働と用いられ余剰生産物を産出するからであった。これらはそれぞれ、将来利得をもたらすものとして資本を捉える未来志向的、過去に生産され蓄積されたものとして資本を捉える過去志向的な側面をもっている。だが、これらの立場はともに、資本の素材を資本そのものと見なしていたり、資本が増殖するという資本の内容をもって資本そのものであると見なしたりする立場であるに過ぎない。そうした旧来の資本観は、本稿で得られた資本概念が物象化した派生形態であることが立論される。それに対して本稿は、資本形式の資本内容に対する論理的先行性が主張され、資本の姿態変換という形式を通じて自己増殖運動という内容がもたらされるということが確認される。この意味でまさに、資本は本質的に資本を生産するのである。

なお、数学的付録においては、回転期間と成長率との関係に関する仮定の検討が行われているほか、価格ベクトルと利潤率、数量ベクトルと成長率の存在証明が与えられており、また、回転期間が成長率に依存する場合のマルクスの基本定理の証明も行われている。